

# 第3回桃山学院大学図書館書評賞受賞作一覧

## 〔優秀書評賞〕

木谷 友子（文学部2年次生）

山本 文緒『きっと君は泣く』 角川書店 1997年

## 〔佳作〕

根来 厚志（国際教養学部1年次生）

辺見 庸『もの食う人びと』 角川書店 1997年

川畑 七海（社会学部3年次生）

山田 悠介『レンタル・チルドレン』 幻冬舎 2006年

笠松 侑加（国際教養学部1年次生）

今泉 みね子『ドイツを変えた10人の環境パイオニア』  
白水社 1997年

応募要件:①書評に用いる言語は日本語とする。

②応募作品は応募者の独創的な書評であり、かつ未発表原稿に限る。

他者の書評の切り貼りやコピーであってはならない。

③図書1冊につき書評1篇とし、本文は800字以上1,600字以内とする。

④応募者は「ワープロ」で書名、学籍番号、氏名を記入のうえ、本文を作成し、プリントアウトしたものを提出する。なお、入選者については、後日、フロッピー・ディスクで同一のものを提出する。

⑤A4版横書き、全てを1ページに収める。本文は、40字×40行の設定とする。

この書式を遵守しないものは選考対象から外す。

⑥応募は、1人2篇以上でも可とする。（ただし、受賞は1人1篇とする）

⑦入選作品については、図書館ホームページまたは印刷物で書名、学部、学年、氏名、本文を公表するので、これを承諾のうえ応募すること。

⑧応募された書評は返却しない。

書評の要件:①当該書籍の内容の要約または概要が盛り込まれていること。

②その書籍の良い点や悪い点が明示され、それに対するコメントが述べられていること。

③文章の読み易さ、表記の適切さ、文章構成の確かさに留意すること。

# 総合講評

図書館長 社会学部教授 松永俊男

図書館書評賞も今年度で3回目になりました。応募作品数は、第1回目の一昨年度が55点、昨年度が140点でしたが、今年度は121作品の応募がありました。各学部から選出されている図書館委員5名の合議により、優秀書評賞1編、佳作3編を決定しました。残念ながら今回も、最優秀書評賞の該当作品は認められませんでした。

今回も指定の書式(本文の1行は40字で40行以内)になっていない作品がかなりありました。書式が指定されている場合には、それを順守することが第一に求められることです。また、これも例年のことですが、本学図書館に所蔵されていない図書のため、選考対象外とされた作品がかなりあります。応募要項はきちんと読むことが必要です。

書評というかぎり、本の内容が的確に紹介され、それに対する評者の評価がなければなりません。しかし残念なことに、応募作品の多くは、内容紹介に止まり、評者の評価がありません。「面白かった」「役に立った」といった感想を書いただけでは書評にはなりません。その本のどこが優れているのかを指摘しなければなりません。また、本に書かれていることと、評者の意見とが明確に区別されていない作品もかなりありました。この区別は明白でなければなりません。

今回の受賞作のうち、優秀賞の『きっと君は泣く』は、応募作品の中では書評として最も整っていました。ただし、原作では家族と性の問題が重要なテーマになっているのに、それに一言も触れておらず、内容紹介に不足があります。そのため、最優秀作品とは認められませんでした。この優秀賞の受賞者は、昨年度、佳作入選でした。来年度はさらにも上を目指して努力することを期待しています。

佳作3作品のうちでは、『もの食う人びと』が最も高く評価されました。内容紹介はほぼ正確で、自分なりの評価を自信を持って述べています。しかしその感想は、貧しい国の人々のためになにかをしなければならない、といった上からの目線に止まっています。原作は、日本がバブルに浮かれていた1994年に書かれた警告の書で、「飽食の中にしのびよる飢餓」を予言しています。そのことに注目すれば、もう一步踏み込んだ議論ができたはずですが、『レンタル・チルドレン』は、未読の人に原作を読んでもようと思わせる力があります。しかし、一貫したテーマがある小説なのに、それがないように紹介しているのは、原作の内容を十分に理解していないといえます。『ドイツを変えた10人の環境パイオニア』の内容紹介は目次を転記したにすぎず、そのうちの1章だけについての要約にも誤りがあります。ほかにも問題がありますが、書評としての形になっていることと、環境問題への意欲を買って佳作としました。

今回の応募作のうちには、図書の一部だけを読んで、あたかも全体を読んだように書いている作品がいくつもありました。当たり前のことですが、対象図書のすべてを読み、まずその全体がどのようなものか紹介することが必要です。「まえがき」と「あとがき」をなぞって書評をでっち上げるのは、最低の行為です。

以上の点を参考にして、次回以降もより多くの学生諸君から、より素晴らしい書評が出されることを願っています。

本書は1997年に文庫化された、山本文緒著の小説である。タイトルから連想されるような、甘く儂い恋物語では決してない。交錯する人間関係の中で、人々の裏の心理が織り成す切なく激しい愛憎劇である。

主人公はコンパニオンの派遣会社に所属する23歳の女性、椿。彼女には学歴も運動神経もなく、性格も高慢で我が侷である。しかし、自他ともに認めるほどの素晴らしい美貌の持ち主であった。彼女は自分の容姿を唯一にして最高の才能だと自負していた。

その自信を裏付けているもの。それは椿の名付け親、祖母・牡丹の存在だった。彼女は刃物のように鋭い美しさと気高さを持っていた。老いてなお揺るがない美貌に椿は心酔し、祖母に認められた自分にも同じ明るい未来が約束されていると疑わなかった。女は美しくさえあれば傲慢で奔放に生きることが許されると信じていた。

そんな順風満帆だった椿の人生がゆっくりと狂い始める。牡丹が呆け始めたのだ。自分の将来の姿だと信じてやまなかった憧れの祖母が、ただの死に向かう老人になってしまった。続けざまに父親が破産したあげく重病患者となり、生活力を失ってしまう。派遣会社もクビになり、百戦錬磨だった恋も何故か上手く行かない。唯一の女友達も失い、元々疎遠だった母の心も完全に椿から離れてしまう。心の拠り所だった祖母はもはやただの重荷でしかない。この世に恐いものなどなかったはずの椿の居場所がどんどん失われていく。

窮地に立たされた椿が継いだのは、祖母の愛人だった。だが、そこで思いがけない祖母の正体が明らかになる。絶望と葛藤の末、椿は美しさの本当の意味や信じるべきものを感いながらも探し始める。

愛も財産も失い、「結婚」という求めていたはずの幸せからも自ら背を向けた椿。待ち受けているのは、間違いなく過酷な運命である。誰も助けてはくれない。彼女は真っ暗で寒い夜の道を、それでも自分の足で歩き続けていく。

「お前に欠けているのは想像力だ。」作中で主人公に投げつけられる侮蔑のひとつである。何事にも斜に構え、世の中を何もかも分かったような顔をしていた椿だが、自分を守っていたものが剥ぎ取られた時、初めて自分の甘さや無力さを思い知る。傲慢で、人間関係は探り合いと駆け引きの連続。自己防衛を第一に考え、表面だけを綺麗に取り繕う。そんな自分の姿を美しいと信じていた椿の歪んだ美意識は、まるで現代人の心の膿を掻き集めたようである。

また、迷走する椿の支えになった人物も非常に興味深い。親切的な女友達ではなく、椿と正反対の容姿・性格を持ち、彼女と衝突を繰り返していた女性・魚住。そして、天使のように優しい性格の男である中原ではなく、椿ととてもよく似た性格ですべてにいいかげんな男、群贅である。親切であること、優しくあることは美德ではあるが、愛ではないということを感じ知らされた気分させられるのである。

椿が最後に選んだ答えは、自らの力で生きていくことだった。すべてを失った彼女だが、その潔い姿はどこか力強く、美しかった。「美しくある」ということは、果たして本当に「美しく生きる」ということなのか。本当の美しい心とは一体何なのかを問いかける、絶妙な毒と迫力を持った作品である。

辺見 庸 『もの食う人びと』

根来 厚志（国際教養学部1年次生）

今日、日本は飽食状態にあるといわれている。私もそう思う。食べたいときには何でも食べられ、食べたくないときには何も食べなくてもよい。それで生きられるからだ。しかし、世界の国々ではどうだろうか。人々はいま、何を感、どんな顔をして、どんなものを食べているのか。いないのか。その土地の文化や問題は、ものを食べるということにどう影響しているのか。

本書では、その影響に興味を持った辺見庸が、東南アジアからアフリカ、ヨーロッパ、ロシア、そして中国、韓国へと旅をする。その途中で出会った人々、特に、隅に追いやられてしまった人たちとともに、その人たちが日ごろ食べているものを食べる。そのことを通して私たちに、世界には私たちが知らない問題がまだまだたくさんあることを訴えかけるという内容である。

彼はそのことを淡々と描いている。それが余計に悲しい。飾りも誇張表現もいらず、ただありのままを描くだけで十分だという現状が悲しい。日本は平和で、特に紛争はない。ものも食べられるし、生きられる。しかし、だからといって私たちには関係のない問題ではない。私たちが何かをして、それで状況が改善されるかどうかはわからない。それでも同じ人類として、私たちは何かしなければならぬと思う。

山田 悠介 『レンタル・チルドレン』

川畑 七海（社会学部3年次生）

本作品は著者・山田悠介特有の独創的な描き方から、読み始めてすぐに物語の世界へと引き込まれ、最後まで一度も休むことなく読み終えた。現実ではあり得ない話が、とてもリアルに感じられ、物語の展開を実際に見ているかのように感じ、悲しみや不安、恐怖、驚嘆など、たくさんの感情が押し寄せてくる作品である。予想できないような伏線と、この後の展開が少し予想できるような伏線が上手く張り巡らされており、予想どおりにも関わらずとても恐怖を感じる場面や、突然伏線の意図が明らかになるなど、読者の心を掴む描き方がとても上手に感じた。

しかし、物語のテーマが見えない分、途中から話の筋に疑問を抱くことがあり、最後の結末は全てを覆すような展開だったので、一貫性のある感動作を期待している方には、あまりお勧めできない作品かもしれない。

それでも様々な伏線や謎が明らかになっていく面白さや、スピーディーな展開から、途中で飽きることはなく、一度読み始めると最後まで読んでしまいたくなる作品であると思う。現実的に解釈しようとするのではなく、キャラクターの心情に焦点を当て、頭の中で場面を思い浮かべて読んでいくと、物語の世界に引き込まれるだろう。

今泉 みね子 『ドイツを変えた10人の環境パイオニア』

笠松 侑加（国際教養学部1年次生）

本書は、ドイツで環境対策のために尽力しているさまざまな分野の人たちの活動が、どう実践され、どのように市民に受け入れてもらったのかに重点をおいた報告書である。著者が、こうした人たちと出会う機会を得て、国家を動かすほどの彼らの力に感動したことが本書の書かれたきっかけである。

使い捨て容器税を導入したロルフ・ヘデリッヒ氏はカッセル市の税務局長である。ドイツで初めて、使い捨て容器に対する自治体の課税が認められたのである。大型ファーストフード店はこの制度に反対したが、一般市民の反応は良く、飲食店やインビスマサービスについて考えるよい機会と反応は良かったみたいである。結果、1200の飲食店のうち95%が使い捨て容器をやめたのである。

私は以前から環境問題に興味があり、風力・太陽光発電が世界一であるドイツの環境対策をもっと知りたいと思ったのが本書を読んだ理由である。本書を読んで「行動しなければ、何も変わらない」ということを教えられ、痛感した。著者は、あとがきで日本がドイツから環境対策の点で学ぶものは「自分の生活を率先して変えなければならないのだ。」という個人の公共に対する責任意識だと述べているが、正にその通りだと思う。今、私たちは国に任せきりではいけないのである。私たちが“行動”しなければならない。

（注）佳作3点については、本文のほぼ半分を抜粋して掲載した。